



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                  |                                                                                   |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | スタディ・クエスチョンで読む古典：「政治学は科学として成りたちうるかー理論と実践の問題」（マンハイム）を読む（その4完）                      |
| Author(s)        | 長島, 美織                                                                            |
| Citation         | メディア・コミュニケーション研究, 74, 21-43                                                       |
| Issue Date       | 2021-03-30                                                                        |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/80910">https://hdl.handle.net/2115/80910</a> |
| Type             | departmental bulletin paper                                                       |
| File Information | 02_nagashima.pdf                                                                  |



## スタディ・クエスチョンで読む古典 「政治学は科学として成りたちうるか—理論と実践の問題」 (マンハイム)を読む(その4完)

長 島 美 織

### 1. 読解題材としているマンハイム論文とスタディ・ クエスチョン・メソッドについて<sup>1</sup>

古典的な学術文献を読み込むことは、社会科学を学ぶものにとって、欠かせない過程である。それは、折に触れて立ち返ることのできる堅固な学問的パラダイムを与えてくれるとともに、健康な批判的精神を維持することを教えてくれる。現代の大学教育においては、そういった古典を読むためのカリキュラムを組むこと自体が難しくなってしまったが、時間をかけてこうした難解な古典に取り組むことを、簡単に諦めてしまって良いものでもない。自分勝手な読みに落ち込むこともなく、また、途中で放りだしてしまうこともなく、安易な理解を拒む先人の書物を読み解くことができれば、それはまたとない「学びの経験」(Learning Experience)を読者にもたらすからである。

本稿は、このような考えに基づき考え出された、スタディ・クエスチョン・メソッド(Study Question Method)を紹介するものである<sup>2</sup>。スタディ・クエスチョンという形で予め示されたいくつかの問いを、読解の際の道しるべとすることで、その答えを探しながら、学問書の世界を歩いてみることができるように組み立てられている。

本稿を(その4)とする一連の試みのなかで読み解いてきた題材は、カール・マンハイム(1893~1947)の主著『イデオロギーとユートピア』のなかの第2論文「政治学は科学として成りたちうるか—理論と実践の問題」である<sup>3</sup>。論文全体としては、最初の部分を解説したのみだが、5つの主だった思想の認識基盤の検討が今回のファシズムで区切りがつくことを受けて、この読み解きのシリーズも今回で終了とする。

以下第2節では、(その1)<sup>4</sup>と(その2)<sup>5</sup>、そして(その3)<sup>6</sup>の内容を簡潔に復習している。続く第3節冒頭で、本稿で扱うファシズムに関するスタディ・クエスチョンを列記した後、第4節から、それらのSQを導きの糸とした学問的読みの実際が紹介されている。引用はすべて対象論文からのものであり、ページ数は、『イデオロギーとユートピア マンハイム』(高橋

徹・徳永恂訳 中公クラシックス 中央公論新社 2006 年) によっている。引用中の下線は筆者のものであり、強調のための点 ( ` ` ` ) は、原著による。

## 2. 前回までの内容

(その 1) では、科学としての政治学を探求する、上記マンハイム論文の最初の部分を読み解いた。その第 1 節は、「なぜこれまで政治についての科学は存在しなかったのか」という問いの形をとっており、当時、政治学と考えられていたものを逐一取り上げて分析することにより、この問いの答えを探すかたちになっている。

マンハイムにとって、政治学とは、学としての整合的な体系を備えている一方で、また他方絶えず移り変わる現実の状況をも、正確に把握できるものでなくてはならない。刻々と変わる現実に基づき、その場に必要とされる判断を教えることがその学の目的でもあるからだ。非合理的な力の衝突と変容のなかで、ある決断を伴う動的な行動を可能にするための知識体系として、政治学が求められているからである。いいかえれば、政治学とは、「流動的な状況のなかでの決断を伴う創造的行動についての科学的な知識体系」となる。

しかし、このような「非合理的な行動に対する学問化」には、少なくとも、二つの困難が伴う。それは、学問の対象の性質と、学を作ろうとする理論家にそれぞれ帰属される。前者は、常に変化・生成している現実をどのように規則化するのかという困難であり、後者は、理論家の状況「拘束」性である。政治においては、議論のための共通の土俵というものが厳密には存在し得ず、思想が違えば、立っている土俵自体も違い、理論家自身もその認識基盤に拘束されているからである。

このようなことを確認したのち、第 2 節において、マンハイムが試みることは、「認識そのものが政治や社会によって拘束されているというテーゼの証明」である。それは、この表題が示す通り、「異なる政治思想は、異なる認識基盤を持っている」ということを論証しようとすることである。具体的には、5つの主だった政治の潮流をとりあげ、各思想がどのような概念連関で現象を理論化するか、そして、「理論と実践との関係」をどのように扱っているか、について、綿密な分析を行うこととなる。

ここで、マンハイムによって検討される 5つの主義思想は、以下のとおりとなる。

- ① 官僚主義的保守主義
- ② 保守主義的歴史主義
- ③ 自由主義—民主主義的市民思想
- ④ 社会主義—共産主義的観念
- ⑤ ファシズム

(その2)では、最初の3つを扱った。まず、①の官僚主義的保守主義は、「政治の問題を行政学の問題にすりかえる」基本傾向をもつとされ、その限界は、今あるものとは異なる秩序の可能性を認識できない点である。官僚主義的保守主義は、「非合理的な活動の余地という領域」を認めず、すべてにおいて行政を貫くことが、秩序を維持することであると考えている。しかし、マンハイムにとって、この「非合理的な活動の余地という領域」こそが、政治学の対象領域であり、この領域を無視した政治学は存在意義を持たないものである。

貴族や上流市民層のうちに支持層をもつ②の保守主義的歴史主義は、①と同様保守主義の一種であるが、決定的な違いは、この思想が、官僚主義的保守主義が排除していた、非合理的な領域を認めていることである。よって、マンハイムの意味での政治の存在をこの思想は認めている。しかし、保守主義的歴史主義は、それを、長い時間をかけて選ばれた貴族たちによってのみ培われる本能と同一視し、知識化できないものであると考える。

マンハイムのいう政治の領域を見ない官僚主義的保守主義と、それを選ばれたものの魂のみが知り得るものとする保守主義的歴史主義、それらのいずれにも、マンハイムの考える「科学としての政治学」は存在しないのである。

次の③自由主義—民主主義的市民思想の中心的思考方法は、主知主義である。近代の主旋律である主知主義では、意志、欲望、怒りなどの人々の感情はもとより、社会階層や性別といった人々の生きる状況を構成する諸要素もいずれは乗り越えるべき、そして乗り越えられる変数と考えられている。主知主義では、すべてを知性化して処理しようとする力が、常に強力に作用しており、「科学としての政治学」も、国家学と同一視される形で、主知主義的な情熱とともにすでに追求されてきている。そしてその知識化と相まって、議会、選挙制度、国際連盟組織、大学の政治学科といった制度構築も行われてきている。

しかし、マンハイムにとっては、こういったやり方は、マンハイムが政治とよぶ非合理で流動的なものを、表面的に知識化しているだけで、むしろ主知主義の限界を示すものである。近代の主知主義は、主観的なものはいずれ全て客観的な知識に吸収されるべきであると考えている傾向があり、「感情に支配されがちな評価的思考をどうしても許すことができない」のである。そこでは、非合理で流動的なものと合理的なものは、実は根本的な認識の構成要素において分かち難く関連しているといった考えは、完全に排除されている。市民層の主知主義は、このような根本問題に煩わされることなく、「迷うことなき楽天主義をもって、ひたすら非合理主義を完全に払拭した領野の獲得をめざす」(222)のである。しかし、市民層が、このような極端な主知主義をもって、歴史に登場するのには理由がある。それは、本能や魂の力といった主観的なものを信奉している歴史主義的保守主義と対峙しながら、台頭してきた思想だったからである。

(その3)では、この③自由主義—民主主義的市民思想に対抗するものとして歴史に登場してきた④の社会主義—共産主義的観念を読み解いた。主知主義に対峙し、マルクス主義は、非

合理的部分を切り捨てることなく、イデオロギーと弁証法を発展させる。

マルクスはまず、「歴史や政治上の事物には純粋な理論は存在しない」(223)という事実を明るみに出すが、このマルクス流のイデオロギー概念には、それを「敵の側」(224)にのみ認め、政治闘争における意図的な欺瞞という意味で使うという2つの誤謬がある。これは、この概念の本質的な意義を考えると、非常に残念なことである。そこでマンハイムは、イデオロギーを「特定の歴史や、社会における存在位置に必然的に属している見方、およびそれと結びついている世界観ないし考え方」(224-225)、つまり、思想の存在拘束性として再定義し、社会学的に有用な概念とすべく、再構築を試みる。どのような存在であれ、利害関係や社会(階級)、自然条件といったその存在のあり様に規定されているものである。マンハイムは、存在に規定されている思想が当てにならないとは考えず、むしろ、認識基盤が存在に拘束されていることを度外視し、ある思想を普遍的と見なししてしまう主知主義的な危険性を強調する。

マルクスの提唱したもう一つの考えは弁証法である。現実弁証法は、理論と現実と行動の関係を以下のようにとらえている。

まず、①理論は現実の関数であり、②この理論は特定の行動をひきおこし、そして③行動は現実を変化させる。そして、行動によって変えられた現実状況は、以前とは異なる存在拘束性を作りだし、新しい理論を生みだすことに繋がっていく。この弁証法は、「非合理的な活動の領域のただなかに置かれ、この非合理性を知らながらも、なおかつ合理化を断念しようとなしない人間の総合の営み」であり、マンハイムの考える政治の領域の科学的な理解を大きく前進させている。まったくの非合理主義(保守主義的歴史主義)と、極端な主知主義(自由主義-民主主義的市民思想)という二つの際立った立場しかなかったなかで、社会主義は、両者の要素を弁証法を通して取り込んでいるのである。

そうした上で、社会主義は、さらにその構造上の傾向(=法則に準ずるもの)を、政治経済、社会、そして理念の領域において、抽出しようと試みている。加えて、マルクス主義が、これら3種の構造連関の絡み合いの全体的把握を志向していることをマンハイムは評価している。マンハイムにとっての政治学は、この全体的な連関を今まさに生成しつつある領域に適用することで始めて構築されうるからである。

マンハイムはこのように、マルクス主義の二つの強みを分析した上で、さらに、社会学者としての視点から、マルクス主義そのものの存在拘束性を問題にする。社会学的にみれば、マルクス主義は「ある特殊な新興階級の理論」(231)であり、この階級は、「揺れ動く大衆」(231)ではなく「組織された歴史的集団」(231)を構成するものである。そしてこのような組織化を進めるために何より必要なのは、過去と将来に渡って長期の展望を提供する合理化された理論である。つまり、理論化によってのみ、この階級は集団としての結束を保つことができるのだ。

共同体の要素が支配する社会においては、伝統や共通の感情に則った結束が可能であるが、

社会経済構造上の類似性で結びつくためには、この理論化が欠かせない。「感情に訴えての結合は近いところにしか通じないが、理論化された世界像は遠くのものをも結合させる力をもつ」(232)からである。ここにマルクス主義が非常に強い理論化への要求をもつ理由がある。しかし、この階級が社会の変革を望んでいる限りにおいて、この極端な合理化をすべての局面で徹底化してしまうことはできない。社会転換への糸口が閉ざされてしまうからである。この合理と非合理のせめぎ合いは、弁証法の「転化」という概念に凝縮されている。

「転化」とは、あることの頻度が増えていくと、そのものの自体の質が変わってしまう現象のことであり、主知主義による完全な理論化はここでは的外れなものとなる。それは、変化のタイミングは、1) 直感によってしか把握できず、また、2) 計算しようとする行為そのものも状況に干渉するという点で、理論化不可能だからである。1) は、先にみた保守主義的歴史主義の直観主義を想起させ、2) は、理論家の存在拘束性を意味する。つまり、予測する行為さえも社会の外ではなく社会の中で行われているので、それは、「動向」を変化させるだけでなく、「動向の構造」をも変化させるからである。

マルクス主義においては、非合理的活動の余地のある領域(=政治)を、「構造の傾向」(≡法則)としてぎりぎりまで理論化し、さらに、これらの傾向が、どのタイミングでどのように転化するか、その「転化の法則性」をも探求している。マルクス主義における理論と実践の関係は、「理論」的に歴史的思考のなかで現在位置を決めようとするとともに、今求められている「行動」をも探求するというものであり、社会主義理論は、「理論と実践」とを人工的に切り離そうとはしないとマンハイムは分析している。

### 3. Study Question Method による読解—「2 認識そのものが政治や社会によって拘束されているというテーゼの証明」(後半部)を読む(236-253)

本稿(その4)では、⑤のファシズムから読み始めることとなる。該当するスタディ・クエスチョンは、以下のとおりである。

SQ6. ファシズムについて

SQ 6-1. ファシズムを担うのはどのような人びとか?

SQ 6-2. ファシズムは、どのように理論と実践の関係をとらえるとされているか? ファシズムの核心は、マンハイムによってどのように表現されているか?

SQ 6-3. ファシズムは、非合理主義であるということの意味を、保守・自由・社会主義と比較することにより、明らかにしなさい。

SQ 6-4. ファシズムにおける歴史という概念のとりえ方を保守・自由・社会主義と比較する

ことにより、明らかにしなさい。

SQ 6-5. 科学一般に対するファシズムの態度はどのようなものか？

SQ 6-6. ファシズムにおける「科学としての政治学」はどのようなものか？

SQ 6-7. 社会学的にみると、ファシズムはどのような集団のイデオロギーであると考えられるか？

SQ 6-8. ファシズムの非歴史性についてのマンハイムによる社会学的分析はどのようなものか？

SQ はおおよそ、テキストを読み進める順番に沿うように考慮されている。このため、SQ6-1 と SQ6-7 のように、関連することがらが、2 度取り上げられることがあることに留意されたい。

#### 4. SQ による読解：ファシズムについて (236-253)

それでは、SQ に添って、読み解いていこう。まずは、第一問目からである。

SQ6-1. ファシズムを担うのはどのような人びとかな？

今まで扱ってきた4つの思想においても、この点を確認してきたが、ファシズムについてもまず同様の点を確認しておこう。ファシズムを進める指導者たちに関して、マンハイムは以下のように述べている。

歴史をつくるのは大衆ではなく、理念でも「暗黙の力」でもない。そのときどきに自己を主張するエリートたちである。(236-237)

すなわちファシズムの担い手は「自己を主張するエリートたち」(236)である。この点については、SQ6-7で再度詳しく取り上げるので、ここでは、この程度にして、先を読み進めたい。

SQ6-2. ファシズムは、どのように理論と実践の関係をとらえるとされているか？ファシズムの核心は、マンハイムによってどのように表現されているか？

5つの思想を比較するに際して、それぞれがどのように理論と実践の関係を捉えているかと

いう点は、中心的な課題であったが、それについて、ファシズムに関しては、冒頭から、以下のように述べられている。

理論と実践の関係を把握するファシズムの仕方には、きわめて独特なものがある。ファシズムは、本質的に行動主義ないし非合理主義的な基調をもち、このところ勢いを得てきたさまざまな非合理主義哲学や政治理論と好んで結びつく。(236)

この「きわめて独特な」側面について、以下、マンハイムは、非合理主義、歴史、そして、科学といった論点に関して、今までみてきた他の思想と比較することによって、ファシズムの独特さを描きだしていくこととなる。ファシズムの核心は、非合理主義的といった言葉や、行動主義といった言葉で表されている。これらが実際にどのようなことを意味するのかを、先を丁寧に読み進めることによって把握していくことが必要である。

**SQ6-3. ファシズムは、非合理主義であるということの意味を、保守・自由・社会主義と比較することにより、明らかにしなさい。**

該当する記述は以下のとおりである。

これは完全な非合理主義であるが、きわめて独特なものであって、保守主義者が知っていたような非合理主義でもなければ、合理性を超えているという意味での非合理でもない。また民族精神や暗黙の力とも違うし、長い時代を通じて連綿と働いている創造力への神秘的信仰でもない。むしろあらゆるこういった意味での歴史を否定して、新しく登場してくる行為の非合理主義である。(237)

ここで、ふたたび、「独特」という言葉が使われていることに注目してほしい。それは、非合理主義であるが、「保守主義者が知っていたような非合理主義」ではない。また、「合理性を超えているという意味での非合理」でもないと述べられている箇所では、自由主義的・主知主義的合理主義との対比が背景にある。ファシズムの非合理主義は、この自由主義的・主知主義的合理主義のアンチテーゼとしての非合理性でもない。さらに、今までみたなかで、非合理的な要素を最も備えていた保守主義的歴史主義と比較して、保守主義的歴史主義が信じていた「民族精神や暗黙の力」、「長い時代を通じて連綿と働いている創造力への神秘的信仰」とも、異なるものであることを主張している。これらいずれも該当しないとされ、このような意味で、ファシズムの非合理主義は、「独特」なものであり、「歴史」を否定して登場してきている「行為の非合理主義」であると述べられている。この歴史に関する考え方については、さらに

次のSQ6-4で詳しくみていくが、少し先取りしていうならば、彼らは、歴史を作ろうとしている、とマンハイムは考えているということができる。

ここでマンハイムはブロードレロの1927年の演説を引用しており、注22(257-258)は重要である。注22でさらに引用されている部分で、ブロードレロは、ファシズム特有の「特徴ある態度や立場の究極の基礎」を「たんに宣言用につくられた内容」から区別することが、ファシズムの本質把握において必須であると述べている。マンハイムは、彼の論議をこの論文の課題である理論と実践に対する態度に限り、制度上の理念については、踏み込まないことを述べた後、ファシズムの成立過程について、バッケラートを引用しつつイデオロギーの概念からの分析を展開している。それによると、1919年ごろから始まったサンディカリスムの傾向をもつムーブメントであった第1段階で、行動主義的・制度主義的傾向が人々の心理に入り込み、その後1921年11月から始まる第2段階で、右旋回を伴う国家主義的理念が前景化し、ファシズムは金融資本や巨大産業と連携しながら、その地歩を固めていったと述べられている。

**SQ6-4. ファシズムにおける歴史という概念のとらえ方を保守・自由・社会主義と比較することにより、明らかにしなさい。**

237ページ中頃から241ページ冒頭にかけて、マンハイムは、歴史という概念がそれぞれの思想潮流でどのように異なるのかということについて、「ファシズム」対「保守・自由・社会主義」という対比のもとに、ファシズムの「独特」さを描きだすことを試みている。保守・自由・社会主義がもっている、歴史という概念のとらえ方に共通する点とはどのようなものだろうか。該当箇所を読んでみよう。

これらの理念は、すべて他の面では激しく反目しあっているにもかかわらず、じつは共通の出発点をもっている。つまり、歴史のうちには、いわば一つ一つの出来事に位置づけを与える特定の構造があり、それはなんらかの仕方認識されうのだという共通の前提から出発している。(237)

冒頭の「これら」は、保守・自由・社会主義を指す。「共通の前提」といわれているものは、保守・自由・社会主義すべてが共通して仮定していることで、それは、歴史はランダムなものではなく、ある一定の構造をもっている、ということである。つまり、歴史をどのようにとらえるべきかといった点や歴史の知見をどのように利用するかといった点に関しては、主義ごとに考え方の違いがあるが、いずれ歴史が何らかの構造を持っているということに関しては、ファシズム以外の思想はすべてそれを是とするという点で一致しているということである。

同じ内容を言い換えているテキストは、もう3箇所ある。まず、1箇所目は、以下の通りで

ある。

しかしかれらはすべて、歴史のうちにはなんらかの仕方では把握される連関が支配している、ということを確認している。はじめのうちは、神の摂理による計画が歴史のうちに見いだされると考えられ、のちには、動的・汎神論的にとらえられた精神のより高次の合目的性が歴史をつらぬいていると考えられた。こういう考えは、まだ形而上学的段階にとどまっている歴史の流れのうちに、個々ばらばらの出来事の系列だけでなく、いくつかの重要な要因が凝集して作用していることを認めようとする、きわめて生産的な作業仮説を準備する役割を果たした。自分の行動の尺度をみつけるために、歴史の内部構造を理解しようという努力がなされたのであった。(238)

この「かれら」は保守主義者、自由主義者、社会主義者をさす。かれらは、歴史には、連関があるということを疑っておらず、それを理解することは、現在の行動の基準を設定するのに有効だと考えていたのである。2番目は以下の箇所である。

かれらの観察の仕方はそれぞれ、方法からいっても内容からいっても本質的に違っているにかかわらず、三者共通の地盤の上に立っている。政治的行為を歴史的空間のなかで遂行されるものとしてとらえ、しかもその遂行にあたっては、人々が巻きこまれている歴史全体の動きにのっとって方向を決めることが現代ではことに必要なのだ、そう考える点では、三者は異なるところはない。(239)

この部分では「歴史的空間」というものが理解しえるものとして提示され、なおかつ、その歴史全体の動きをなんらかの形で理論化することも可能であると、保守主義、自由主義、社会主義は考えているということが主張されている。政治的行為は、そのような分析可能な歴史的空間のなかで、全体の動きにのっとって、決められるべきであるという共通認識があると述べられているのである。さらに、保守、自由、社会主義が共通して認めている歴史の連関について述べている箇所の3番目は、以下のとおりである。

つまるところ、何が保守主義、自由主義、社会主義を結びあわせているかといえば、それは、歴史上の動きや出来事は一定の連関のもとに起こる、という前提に帰着する。(239)

先ほどは「構造」という言葉であったが、ここでは「連関」が登場する。以上のように、合計で4カ所にわたって同じ主張が表現を換えて述べられている。このように再三にわたって、繰り返し言及されている箇所は、著者が強調したい点であるので、読解の際に注意深く見る必

要がある。

☞このような箇所は重要である。このような重複をつかんで読んでいくと、マンハイムが言いたいことがわかってくる。

また、その間に述べられたそれぞれの主義の違いについては、以下のようにまとめられる。

| 社会主義                                                       | 自由主義  | 保守主義                               |
|------------------------------------------------------------|-------|------------------------------------|
| 「歴史上の動きや出来事は一定の連関のもとに起こる」250そして、その連関は認識可能であり、それは将来への指針を与える |       |                                    |
| 歴史の連関や構造は合理的に認識可能                                          |       | 「国家や民族の成立の跡を、直観によって、形態学的に認識しようとした」 |
| 弁証法的運動                                                     | 直線的進歩 |                                    |

(著者作成)

その上で、それに対比してファシズムはどのようなものであるかが語られている。今度は、ファシズムに言及している箇所を取り出してみよう。

しかし、なんらかの仕方では人間にとらえられるこの歴史性は、ファシズム的な行為の非合理性の前では消失してしまう。(239)

しかしファシズムから見れば、どんな歴史観も、まったくのつくりものであり、歴史的時間を突破する行為のために撤去されなければならない虚<sup>フィクション</sup>構とみなされる。(239)

保守、自由、社会主義という三つの思想基盤において、歴史が研究されるのは、時代に応じて、可能な行動や考え方は、限られているという想定があるからである。つまり、ある特定の場と時間において、あらゆる行動や考え方が可能なわけではないので、現在の行為・行動を決定する際にどのような歴史的状況にいるのかを把握することが必要だと考えられていたからである。しかし、ファシズムにおいては、それら歴史観は、行動に邪魔なものでしかない。いずれファシズム的行為は、非合理であるので、それらの歴史的構造は、むしろ「突破」されなければならないものなのである。しかし、このようなファシズムにおける歴史性の排除は、一見、かれらが多用する祖国イデオロギーと矛盾するように見える。この点について、もちろん、マンハイムは言及することを忘れてはいない。

ファシズムの中核が無歴史性の理論にあることは、たとえファシズム・イデオロギーのう

ちには、とくに右旋回以降、「祖国戦争」の理念や「ローマ帝国」のイデオロギーが見いだされる、という事実によってもなんら変わることはない。そういう理念は、はじめから意識的に、神話つまり虚構として唱えられたのだ、ということは別にしても、およそ歴史的な思想や行動というものは、なんらかの過去の栄光を理想化したものだと考えられるべきではない。それは、ある区分けできる構造をもった歴史の流れのなかのどこに自己自身がおかれているかを自覚することから成りたつからである<sup>7</sup>。(239-240)

ここで、ファシズムの中核が無歴史性の理論にあるということがはっきり述べられている。この、「無歴史性の理論」がまさしく先述の「歴史概念の違い」である。保守・自由・社会の三者は歴史概念の理論はあると考え、ファシズムの場合、それはない、すなわち「無」とみなし、歴史性自体が存在しないと考えている。

しかし、ファシズムが歴史性を認めないなら、なぜ、ファシズムでよく用いられる言葉「祖国」やイデオロギー「ローマ帝国に戻ろう」、日本でも言われた「祖国のための戦争」などの言葉が用いられるのだろうかという疑問が出てくるだろう。それについては、そのような概念は実は本当の歴史的な理論をもとに作られているのではなく、そのような認識は「もっぱらイデオロギーや神話としての性格しかもたない」(240)と記述されている。つまり「ローマ帝国」や「祖国」、「代々続いているイタリア」などといった概念は、理論ではなくイデオロギーや神話のような役割しかもたない、と述べられている。ここで、先に注22にちなんで述べた「特徴ある態度や立場の究極の基礎」を「たんに宣言用につくられた内容」と区別すべきとした点を想起することが肝要である。これら祖国イデオロギーは、後者にあたる。

ファシズムの純粋に直観主義的な手口にかかると、どんな政治や歴史についての認識も、およそ認識といわれるに値するものは、あとかたもなく溶け去ってしまう。認識はもっぱらイデオロギーや神話としての性格しかもたない、とされるからである。……思想は、ここでは純粋な行為への露払いとしてしか考えられていない。(240)

支配者や指導者は、政治論や歴史論などはすべて神話にすぎないことは百も承知している。かれらはもともとそういったものから自由なのだ。しかし他方—そしてそれがこの考え方の別の一面なのであるが—それらの意義を評価することも忘れない。なぜなら、歴史論や政治論は、感情という人間のうちにある非合理的残り滓を動かして、政治的行動へと駆りたてる熱狂の派生物だからである。(240-241)

ここで「認識」と「思想」の区別に注意が必要である。「思想」のやることは、そのような「役にもたたない理論が幻想にすぎないことを指摘し、その自己欺瞞性を暴露するという役割

を果たすにすぎない。思想はここでは純粋な行為への露払いとしてしか考えられていない」のである。

☞「行為への露払い」という言葉は、マンハイムの非常に特徴的な言い回しである。

「歴史認識はイデオロギーや神話である」とファシズムは考えており、ファシズムの首謀者もそれを承知しているが、そこには別のもう一面があると指摘されている。かれらは、「それらの意義を評価することを忘れない」のである。すなわち首謀者たちは「ローマ帝国」や「祖国」などはたいしたものではない、イデオロギーや神話にすぎない、と思いつつも一方でそれをもつ重要な「意義」を認めているのである。この「意義」とは何であろうか。

なぜなら、歴史論や政治論は、感情という人間のうちにある非合理的残り滓<sup>かす</sup>を動かして、政治的行動へと駆りたてる熱狂の派生物だからである。(239-240)

指導者からみてこのような神話に価値があるのは、大衆の感情を直接操作することができるから、というわけである<sup>8</sup>。

#### SQ6-5. 科学一般に対するファシズムの態度はどのようなものか？

これまでは「歴史」というものに対するファシズムの考え方を追ってきた。次に「科学」に対するファシズムの態度について読み解いていこう。

この直観主義的な見方に立てば、科学とくに精神科学にたいする深刻な懷疑が頭をもたげてくるとしても、なんの不思議もあるまい。マルクス主義は、科学にたいしてはまだひたすら敬虔な態度をとり、ほとんど神智論<sup>グノーシス</sup>的にまで高められた科学への信仰を保っていたのにたいし、パレートに残されている積極的知識としては、まったく形式的な社会力学しかない。ファシズムにおいては、市民社会の末期に再現されたこの冷めた懷疑主義が、運動の初期における自信と結びついているのをみることができる<sup>9</sup>。(241)

ここで登場するパレートとは、イタリア人の経済学者そして社会学者でもある Vilfredo Frederico Damaso Pareto (1848 年 7 月 15 日-1923 年 8 月 19 日) を指す。また、「社会力学」とは社会工学ともいわれるが、大衆の社会的な振る舞いを変化させるための働きかけの仕方を扱っている分野である。例えば、「住宅地では、ゆっくり走行しましょう」、といったモラルを強調するより、道路に緩やかなでこぼこをつけることにより、住宅地で車が高速で走行する

ことを防いだりといったことも含まれる。つまり、社会力学をごくごく簡単にいえば「このような状況や刺激をあたえれば、皆はこのように動くだろう」というようなことをもとにした社会改革であるが、この場合、誰を動かしたいかといえば「大衆」である。「形式的な社会力学」は、いわば大衆を動かすための知識である。そして、ファシズムが、科学として必要としているのはそれだけだと、ここではまず述べられている。そして、さらに、社会力学に加えて有効なものとして、社会心理学をあげている。

歴史が歴史であるゆえんのいっさいのものが、科学的にとらえることはできないとして排除されてしまうところで、なおかつ科学的探究の余地があるとすれば、それは、どんな人間にも、どんな時代にも、ひとしく変わることもない、一般的法則があてはまる領域だけであろう。さきにあげた社会力学以外に有効なものについては、わずかに社会心理学があるだけである。(241)

ここでの一般的法則は、個々の社会がもつ「傾向」とは異なり、より厳密な意味での「法則」を意図しており、従来の静的な科学に匹敵するものである。社会心理学は、このような「一般的法則」、すなわち「どんな人間にも、どんな時代にも、ひとしく変わることもない」人間の深層心理のようなものを探るものとして、形容されている。そして、指導者たちは、「大衆が何によって動かされているか」を知るために、それを「純粹に技術的な知識」として利用するのである。

そして、ファシズムは、このような普遍性を追求する社会工学や社会心理学を通して、主知主義とつながることとなる。ファシズムと主知主義の類似が、ファシズムとマルクス主義との共通性より強い、ということが論じられる部分をさらに読み解いていこう。

さてこうして、この直観主義は、突如としてもっばら一般法則だけを求めようとする市民社会末期特有の傾向と結びつく。その傾向とは、たとえば、コントの実証主義から、一般社会学の建設をめざして、しだいにあらゆる歴史哲学的要素を洗い落としていった傾向である。また一方では、実り豊かな神話の理論のうちに見いだされるイデオロギー概念の起源を、遠くマルクス主義へさかのぼって考える人もいるかもしれない<sup>10</sup>。しかし、つぶさに観察してみれば、もちろん両者の間に本質的な区別があることは明らかである。(242)

冒頭の「この直観主義」というのは、ファシズムが人間の普遍的性質に焦点をあてた社会工学や社会心理学といった学問以外には、歴史学を含めて他のいかなる理論にも価値をおかないことから生じるファシズムの本質のことであり、これが、「突如としてもっばら一般法則だけを求めようとする市民社会末期特有の傾向と結びつく」とある。「市民社会末期」をほかの言

葉でいえば「自由主義・民主主義的傾向をもつ社会の末期」であり、「すべてを理論で割り切ろう」し、「非合理的なものもいずれはすべて理論で克服できる」と考える主知主義を基礎として進化してきた社会そのものが、なんらかのかたちで行き詰まってしまっている状態である。ファシズムの考え方が自由民主主義の根本にある主知主義と結びつく、というのは一見突飛な感じがするかもしれないが、このような面、すなわち「一般法則だけを求めようとする」傾向において接点がある、と述べられている。

次に、その後の部分、「また一方では」以降ではファシズムとマルクス主義が対比されている。こちらはむしろ、一見類似性があるようだが実は全く異なるものである、という論になっている。

たしかにマルクス主義にも、「嘘八百」「欺瞞現象」「虚構」という意味でのイデオロギー概念はある。しかし、歴史の構造を探究する意識は、すべてこのカテゴリーでひっくくられるわけではない。ただ敵方の階級なり階層なりの歴史意識だけが、イデオロギーだといわれるのである。思想や理性は、どれもこれもイデオロギーというレッテルをはられるわけではない。ただ、なにかと蔽い隠す必要がある階層や、その社会的な位置に縛られて、真の連関を認識しようとはしないし、またしようとしてもできない階層は、どうしてもこういう欺瞞行為を犯すのを避けるわけにはゆかない。(242)

この部分では「イデオロギー」という言葉を軸にして、ファシズムとマルクス主義の比較がなされている。先にみたように「ローマ帝国」や「祖国」のようなイデオロギーを用いた大衆操作がファシズムの場合にも行われているので、マルクス主義と一見似ているのではないかと思えるが、実は本質的な違いがあると述べられている。その「本質的な区別」とは、ファシズムの場合、歴史に関してはすべてをイデオロギーだとみなすのに対し、マルクス主義の場合は、全てをイデオロギーだと見なすわけではなく、「敵方の階級なり階層なりの歴史意識だけが、イデオロギー」であり、歴史認識や思想を位置づける歴史学の存在を想定しているということである<sup>11</sup>。これに対して、ファシズムが必要とする唯一の科学とは社会力学であり社会心理学であり、これは、理論というよりも「大衆をどう操作するか」という技術であるといえる。従って、ファシズムからみれば、マルクス主義の歴史思想も、単なる神話のひとつとなってしまうのである。ファシズムは基本的には科学を必要としておらず、人々を誘導するための技術だけを必要としているのである。

こうして、ファシズムの考え方や体験の仕方の特徴は、歴史が現在という瞬間的状況のうちに解消されてしまうことである。そのさい、二つのことが決定的意味をもつ。第一は、偉大な指導者ないし前衛グループ〔エリートたち〕が<sup>エラン</sup>熱情をもつことであり、第二は、

たった一つ可能な知識である大衆心理についての知識に通曉し、それを操作する技術を身につけることである。(243)

最初の文章は、ファシズムが理解可能な歴史の枠組みを想定していないこと、つまり、ファシズムの非歴史性を言い換えている。そこでは、すべてが「神話」となる。そのような状況で必要なのは、elan をもったエリートたちと、大衆操作の技術のみなのである。このように、ファシズムが本質的に科学を否定するものであるとき、それでは、マンハイムの探している「科学としての政治学」は、そこで存在しうるものであろうか、それが次の SQ である。

#### SQ6-6. ファシズムにおける「科学としての政治学」はどのようなものか？

SQ6-4 および SQ6-5 において、歴史と科学を軸として、ファシズムを他の思想と比較することで、その特徴を描きだしてきたが、ここでは、それらをもとにして、この論文の中心課題である「科学としての政治学」について、ファシズムはそれをどのようなものとして見なしているかについて読み解いていこう。以下の部分から、この論議が始まることとなる。

したがって科学としての政治学は、ある定まった意味では、すなわち、行動への道を清めるという機能をもつものとしては可能である。(243)

さて、「行動への道を清めるという機能をもつもの」とはどのようなことを意味するのだろうか。実は、「行動への道を清める」という表現と類似した表現が前に登場したのを覚えているだろうか。「純粋な行為への露払い」(240) がそれである。この「露払い」は相撲などでも用いられるが、「貴人などの先陣に立って道をひらいたり、物事の先鞭をつける人」という意味である。ここでは「行動への道を清める」と「純粋な行為への露払い」は同じ意味で用いられている。つまり、直接行動ができるように、その障害となるものをすべて除ける、そういう役割をするのが「科学としての政治学」だと述べているのである。

その露払いの方法には2通りある。

一つは、歴史をある筋道をもった過程と考えさせるような偶像をすべて破壊することであり、もう一つは、大衆心理を注意深く追求することである。(244)

一つ目は、SQ6-4 で扱った歴史認識に対する特異な立場と関連するが、他の主義が想定している歴史認識の構造を認めず、それを偶像として破壊することである。ファシズムはもともと歴史の構造というものを認めないため、他の思想がそれぞれに描いている歴史の大き

な枠組みを「偶像」として破壊することに、ファシズムにおける政治学は使われるのである。これは遺跡などの実際の破壊行為にもつながる可能性がある。そして、二つ目は、先程みた社会心理学と社会工学という、大衆を動かすための技術を深く追求するという役割である。こういった役割をファシズムにおける政治学はもつ。端的には、ファシズムにおける「科学としての政治学」はこのように「行動のための道をあける」ためだけに存在するのである。

#### SQ6-7. 社会学的にみると、ファシズムはどのような集団のイデオロギーであると考えられるか？

この問題はSQ6-1と明らかに関連している。SQ6-1でみたように、ファシズムの担い手は「そのときどきに自己を主張するエリートたち」であった。それを、ここではよりくわしく掘り下げている。まずは該当する箇所を読んでみよう。

社会学的に見れば、これは暴動主義に立つ集団のイデオロギーの形態である。この集団を指導しているのは、自由主義的・市民的指導者層や社会的指導者層にたいして、アウトサイダーとしての地位にある知識人集団であり、かれらは、近代社会の転形期にたえまなく新しく生みだされてくる景気変動の波を、暴動のために利用しようとする。(245)

社会学的にみると、ファシズムは「暴動主義に立つ集団」のイデオロギー形態であると冒頭で示されている。それは、言い換えると、「アウトサイダーとしての地位にある知識人集団」であり、SQ6-1で扱ったとおり、「自己を主張するエリート」である。さらに、アウトサイダーとして自己を主張するエリート知識人集団がなぜ暴動主義と結びつけられるかということ、かれらは、景気変動の波を社会に急激な変化を起こすために利用するからであると読み取ることができる<sup>12</sup>。マンハイムはさらに続けて、このような時期には、近代の理性的な意識のそこに残基<sup>13</sup>としてひそむ非合理的要素が誘発されやすいと述べている。

ここにおいて、ファシズムの非歴史性は、暴動主義、すなわち「突発的に蜂起する暴動者固有」(247)の「実践概念」と結びつく。そして、新しい社会的集団ともいべき「大衆」の誕生と相まって、独裁の可能性が開けていく。

マンハイムはさらに、ファシズムを暴動主義集団のイデオロギーだとみる自身の主張を社会学的に裏付けるために、集団内の組織化の進行度合いとその集団がもつ認識の間の相関性を指摘している。

実際、有機的に組織化された集団に注目する考え方と、歴史を構造を備えたものと見る見方との間には、社会学上の相関関係があると考えることができる。他方、堅固な組織を欠

く不安定な集合と、非歴史的直観主義との間には、深い親和関係がある。(256)

つまり、組織化が進んでいる集団は、歴史を、構造を備えたものとして認識するのに対して、組織が進んでいない集団においては、歴史はその構造としてではなく、その場その場で変化するものとして、認識される傾向がある、という主張である。

この点は、以下のようにも言い換えられている。

階級や有機的な組織をもつ集団が歴史を瞬間の状況として体験することは、けっしてありえない。ただそういう瞬間の状況のうちで発生し、それに身をゆだねる大衆だけが、歴史を瞬間として体験する。(246-247)

加えてこの相関関係が、集団の成熟度に沿った結束度や安定度の変化によって、また、移り変わっていくものであることに触れている点も、マンハイムらしい動的な視点である。

有機的に組織された集団が解体に曝されるにつれて、それだけ歴史を構造の面からとらえようとする感覚は弛緩し、計算できないものや曖昧な内容にたいする感受性は鋭敏になる。急遽結成された暴動主義の集団は、安定度を増してくるにつれて、それだけ長期の展望や、社会を構造を備えたものと見る見方を身につけてくる。(246)

集団にも、発生期、安定期、衰退期といった流れがあるとする、その時期に応じて、認識も変化してくるということである。これは、様々な組織とその綱領や実際の行動方針などを調べることによって裏付けられるであろう。

さて、このように認識と集団の性質との間に相関関係があるとするならば、ファシズムの特徴である非歴史的直観主義は、どのような集団のイデオロギーなのであろうか。関連するテキストを更に見よう。

一方に強力な指導者とエリートたちの情熱的力、他方に盲目の大衆、というふう、外部に向かっての宣伝よりはむしろ自分の内的な自己正当化に仕えなければならないインテリ・イデオロギーの特徴を示しているこのイデオロギーは、結合度の高い社会的集団の代表だと自任している指導者層にたいする対抗イデオロギーである。たとえば、保守主義的指導者層は民族の仲介者、自由主義者は時代精神の担い手、社会主義者や共産主義者はプロレタリアートの階級意識の代弁者、というふう、それぞれ自任してきた。(247)

ここで、「内的な自己正当化に仕えるインテリ」という観念化はファシズムを理解する上で、重要なものである。これまで各思想について読み解いてきたなかで明確になってきたように、それぞれの思想は、どの社会層を代弁するかについての自覚をもってきた。下記表にあるように、保守主義者は、民族を代表し、自由主義者は、市民層の時代精神を代表し、社会主義者は、プロレタリアート階級を代表してきたのである。

|              |                   |
|--------------|-------------------|
| 保守主義的指導者層は   | 民族の仲介者            |
| 自由主義者は       | 時代精神の担い手          |
| 社会主義者や共産主義者は | プロレタリアートの階級意識の代弁者 |
| ファシズムの指導者層は  | 未だ代弁者をもたない        |

(著者作成)

しかし、このファシズムのイデオロギーは、「結合度の高い社会的集団」、つまり社会において強固な地盤をもっている組織された指導者層に対抗してはいるものの、指導する人々をもたないイデオロギーであると述べられている。そのイデオロギーは、他のだれでもない、自分たち自身の内的な正当化に仕えるためのイデオロギーなのである。いまだ指導者層になり得ていない「インテリ」たちは、外部への正当化よりも、自身の内的な正当化に仕えなければならないからである。

この自己正当化の差異をキーワードとしてマンハイムはさらに、このファシズムを担うエリートたちの意図を掘り下げていく。

それにたいして、こういった自己正当化の差異という観点から見ると、偉大な指導者対大衆という対立図式を操作している集団とは、上昇を狙っているエリートたちだ、ということがわかる。かれらはまだ社会的に確固とした地位をもたず、これから社会的地歩を築かなければならない。(247)

この「上昇を狙っているエリートたち」は先ほどの「アウトサイダーの地位にある」エリートたちと呼応している。彼らはアウトサイダーなので、社会的に確固とした地位を持っているわけではない。では彼らは、究極的に何を目指し、どこに行こうとしているのだろうか。次の部分を読んでみよう。

かれらにとっては、社会のさまざまな構造を転覆したり変革したり保持したりすることは、第一の関心事ではない。現在指導者的な地位を占めているエリートたちを駆逐して、別のエリートがとってかわることが問題なのである。(248)

社会主義の場合には、プロレタリアート階級の利益を代表して、社会の構造を変えたいという目的が非常に強くあったが、ファシズムの場合にはそのような関心はない。興味があるのは「現在指導者的な地位を占めているエリートたちを駆逐して、別のエリートがとってかわること」である。とってかわる別のエリートが、すなわち「ファシズムの担い手」なのである。

**SQ6-8. ファシズムの非歴史性についてのマンハイムによる社会学的分析はどのようなものか？**

マンハイムはまず、現在までの歴史の積み重ねを振り返り、ファシズムが芽生えてくる歴史的状况を描きだしている。

近代社会が変転を重ねてゆくうちに、ときとして進化の道がふさがれ、……市民層によってつくられた道具立て……は、もう階級闘争の続行に役だたなくなる時期がくる。そこではさまざまな危機が表面化し、階級の構成は混乱し、戦闘的な階層の階級意識は混迷に陥る。従って、そういう時期には、階級意識はともすれば泡沫のようなものになり、個々人は自分の置かれている位置や階級的发展方向づけを見うしなう。そして、その後に大衆が成立する。(248)

ここでは、近代社会が進行するにつれて、主知主義的努力や制度設計が次第に機能しなくなる時期が訪れ、人々の帰属意識も根底から混乱し、これまで疑いもしなかった社会組織や制度から、突然個人が放りだされるような状況が発生することが描かれている。そして、このようなリスク社会化と個人化<sup>14</sup>の進行にともない、大衆が発生、ファシズムの登場の土壌を用意するという歴史状況の流れがここに描かれている。

こういう時点に、独裁の可能性が芽ばえてくる。ファシズムの歴史像と、直接行動への道を開く直観主義の理論とは、こういう特殊な状況を誇張して社会生活の全体構造にまでまつりあげたものにほかならない。(248)

このような状況がファシズム登場の契機となるのだ。そしてこのような歴史の瞬間において、「非合理なものの深淵」(249)が浮かび上がってくるのである。このような非歴史的な領域として、マンハイムは二つのものを上げている。

第1に上げられるのは、永遠に変わることなくどんな歴史の出来事の底にも基盤として横たわっている暗い生理的本能の領域である。……こういう歴史の下にひそむ本能的なもの

以外に、非歴史的な領域に属するものとしては、神秘主義者たちが語ったあの超歴史的なもの、われわれの内なる心霊の領域がある。(250)

非歴史的で非合理的なものが、個々の人間がもっている本能の領域と、超歴史的な神秘主義的な領域という二つの両極端であるとする、これらの中間に、合理化可能なものが存在するとマンハイムは続ける。そして、この中間の部分から歴史を眺めるものにとっては見える歴史的な構造も、非合理的な両極からしか歴史を眺められないものの前には、その組織的で具体的な姿を現すことなく、消え去ってしまうのである。

ここからファシズムにおける理論と実践の関係が考察されるが、それは、逆説的なものとなる。このような「ファシズム的・行動主義的体験」にとっては、思想は、幻想か遊びのようなものだからである。非合理的な神話は、人が日々繰り広げる実用的な営みを妨げることはない。むしろ、非合理的なもののなかでも、人々は着実に日常生活を遂行することができるのである。つまり、「人間は、この立場からみれば、考えるにもかかわらず行動するのである」とマンハイムは結論づけている。

ここまで考察してきた直観主義的、そして行動主義的な非歴史性に加えて、マンハイムは最後にファシズムにおける非歴史性を市民層の傾向と結びつけている。これは、自由主義の担い手が市民層であると論じてきたことと関連して、これまでの議論と若干矛盾するように感じるかもしれない。しかし、ここで、ファシズムの指導者はどこかの社会層を代表するという訳ではなく、また「現存の世界の代わりに別の世界、別の社会秩序をつくろうとするのではない」ということに注目することが必要である。ファシズムは、自由主義のように、貴族層にかわっての市民層による政治を望んだり、社会主義が企てたような社会秩序の変革を望んだりしているわけではない。むしろ、ファシズムは、「現存の階級秩序の内部で、ある支配層を別の支配層ととりかえようとする」ことをその根底ではねらっているのである<sup>15</sup>。

ファシズムの成功のチャンスは、……資本主義的、市民的秩序が解体に瀕し、改良を積み重ねてゆく方法は、もう社会的闘争の手段として役にたたなくなるような、あの歴史的段階からあわれてくる。(252)

そしてそのファシズムが一気に攻勢を強めるのは、資本主義的市民生活の秩序の土台が、気づかぬうちに骨抜きにされ、土台を打ち砕かれ、蟻塚のように崩れだし、どのような制度改革も立ちゆかなくなり、袋小路をあてもなく走りまわるような歴史的状況のなかで起こるとマンハイムは述べている。

以上、マンハイムの論文「政治学は科学として成りたちうるか—理論と実践の問題」のセクション1と2を読み解いた。現在の世界の状況を考えるときにマンハイムの考察は、その古さ

を感じさせない。むしろ、多くの有益な視点を含んでいるものであることを指摘して、このシリーズを終了としたい。

- 1 この部分は、長島美織、2017、「スタディ・クエスチョンで読む古典—「政治学は科学として成りたちうるか—理論と実践の問題」(マンハイム)を読む—(その1)」『メディア・コミュニケーション研究』70、59-76の冒頭(59ページ)と同等の内容であるが、本稿が依拠するスタディ・クエスチョン・メソッドの骨子説明のため、繰り返して掲載している。スタディ・クエスチョン・メソッド及び学問的読みについては、「「保険とリスク」(フランシス・エワルド著)を読む—スタディ・クエスチョン・メソッドの試み—その1：第1段落から第4段落：insuranceについて」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』24：109-24内の「1はじめに」(P.110-113)にさらに詳しく説明しているので、併せて、参照されたい。
- 2 「「保険とリスク」(フランシス・エワルド著)を読む—スタディ・クエスチョン・メソッドの試み—その1：第1段落から第4段落：insuranceについて」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』24：109-24およびその続編は、英語の古典的論文を、この方法で読もうという試みである。
- 3 本稿は、2011年になされた北海道大学大学院国際広報メディア学院での講義に基づいている。糸川悦子さん、小塚洋平さんをはじめとした、参加してくれた院生の皆さんに感謝する。志子田敦子さんは、特にその講義の詳細な記録を作成して下さい。本稿はその記録をもとに、加筆修正したものである。
- 4 以下の研究ノートを指す。長島美織、2017、「スタディ・クエスチョンで読む古典—「政治学は科学として成りたちうるか—理論と実践の問題」(マンハイム)を読む—(その1)」『メディア・コミュニケーション研究』70、59-76。
- 5 以下の研究ノートを指す。長島美織、2018、「スタディ・クエスチョンで読む古典—「政治学は科学として成りたちうるか—理論と実践の問題」(マンハイム)を読む—(その2)」『メディア・コミュニケーション研究』71、143-167。
- 6 以下の研究ノートを指す。長島美織、2019、「スタディ・クエスチョンで読む古典—「政治学は科学として成りたちうるか—理論と実践の問題」(マンハイム)を読む—(その3)」『メディア・コミュニケーション研究』72、145-163。
- 7 この部分は、英語訳(Ideology and Utopia: An Introduction to the Sociology of Knowledge, A Harvest Book, Harcourt, Inc. First published in 1936.)の該当する部分(p.122)をもとに、筆者の方で、変更を加えている。
- 8 「非合理的残り滓」とは、パレートの言葉でいうと「残基」、残っているもの、である。人は一見、合理的に理論的に行動しているように見えるが、パレートの考えでは、実は人々の行動の大もとにあるのは「残基」である。人々は合理的に行動しているようであっても、非合理的な残り滓的な感情の動きで行動しており、その衝動を「残基」という言葉でよんでいる。この考え方によると、人々の行為は、残基に誘導されているが、多くの場合その根底の残基は当人にも意識されず、合理的な理論で覆い隠されることが多いということである。
- 9 この文章は、英語訳(Ideology and Utopia: An Introduction to the Sociology of Knowledge, A Harvest Book, Harcourt, Inc. First published in 1936.)の該当する部分(p.123)をもとに、筆者の方で、変更を加えている。
- 10 この文章は、英語訳(Ideology and Utopia: An Introduction to the Sociology of Knowledge, A Harvest Book, Harcourt, Inc. First published in 1936.)の該当する部分(p.123)をもとに、筆者の方で、変更を加えている。
- 11 詳しくは注6に記載してある(その3)を参照のこと。
- 12 これについては、1935年開催の第7回コミンテルン大会で採択された「ディミトロフ・テーゼ」を想起する必要がある。ゲオルギ・ディミトロフ(Georgi Dimitrov, 1882~1949)は、ブルガリア出身の政治家であり、1935年から43年までコミンテルン書記長として反ファシズム運動の組織化をすすめたことで知られるが、ファシズムの本質を金融資本のための資源奪取ととらえている。

「ファシズムは金融資本の権力である。それは、労働者階級と農民やインテリゲンチヤの革命的部分との紛争を挑発し、テロの口実をつくるために創り出された組織である」(ゲオルギ・ディミトロフ『ファシズムと戦争反対の統一戦線のための闘争』1939：p.7、「ゲオルギ・ディミトロフ：ブルガリア人民の星」ステラ・ブラゴエワ著、草野悟一訳、

恒文社、1970：p.193で引用)

「ディミトロフ・テーゼ」は、1933年にナチズムによって政権が獲得されたことをうけて、1935年の第7回コミンテルン大会で、当時書記長であったディミトロフによって提示され採択された。このテーゼは、ソ連や共産党関係者のファシズムに対する認識に大きな影響を与えたものであり、ファシズムを「金融資本のもっとも反動的、排外主義的、帝国主義的な分子の公然たるテロ独裁」と規定している。(『『ジューコフ回顧録』完全版が明かす独ソ開戦の真実』守屋純、バンダ・パブリッシング、2017：p.174) ディミトロフは、第二次世界大戦後、1946年から3年間にわたり、ブルガリア人民民主主義共和国の首相を務めた。

- 13 注8を参照のこと。
- 14 ウルリッヒ・ベック (Ulrich Beck) による一連の研究を参照のこと。
- 15 SQ6-5 および SQ6-6 も参照のこと。

(2020年10月3日提出、2021年1月26日受理)

《SUMMARY》

# Reading Classics through Study Questions

## — ‘THE PROSPECTS OF SCIENTIFIC POLITICS: The Relationship between Social Theory and Political Practice’ by Karl Mannheim — Part4

Miori NAGASHIMA

This is the forth part of a series of an attempt to propose and demonstrate a new method of reading academic masterpieces, which are otherwise difficult for readers to grapple with. The proposed ‘Study Question Method’ helps students read through and understand the target academic manuscript precisely and critically. The sample piece selected in this series of essays is ‘THE PROSPECTS OF SCIENTIFIC POLITICS: The Relationship between Social Theory and Political Practice’, the second article in “IDEOLOGY and UTOPIA” by Karl Mannheim (1893~1947). This part 4 examines the last part of Section 2 of the article, which deals with fascism. It consists of study questions, and corresponding answers and comments.

